



可愛い義妹が
婚約破棄されたいので、
今から「御礼」に参ります。

春先あみ

Ami Harusaki

RB

レジーナ文庫

登場人物紹介

ローゼリア

ドラニクス侯爵令嬢にして、
フィベルト公爵夫人。
「淑女の鑑」と称されながら、
乗馬や剣が得意という一面も。

マーガレット

ロベルトの妹で王太子の婚約者。
未来の国母となることを
期待されていた。
ひたむきで、国のことを
誰より大切に思っている。

ロベルト

フィベルト公爵家の若き当主。
ローゼリアとは幼馴染で、彼女と
妹のマーガレットを心から愛している。

オズワルド

王太子にして
マーガレットの婚約者。
エンジェラに
骨抜きにされている。

シリウス

ある事情から諸國を
旅していた少年。
マーガレットに一目惚れし、
フィベルト家で教育を
受けることになる。

エンジェル

男爵令嬢だが、
オズワルドを
はじめとして
貴族令息たちを
次々と籠絡している。

ミカエル

シリウスの教育係として
ローゼリアがつけた執事見習い。

目次

可愛い義妹が婚約破棄されたらしいので、
今から「御礼」に参ります。

7

書き下ろし番外編

私の可愛い薔薇はらの姫君

363

可愛い義妹が婚約破棄されたらしいので、
今から「御礼」に参ります。

プロローグ

たくさんの隣国に囲まれた小さな国、ミーマニ王国。

大地は緑に溢れ、山々から流れる清らかな川が土を肥やす。その土で育まれた上質な作物が自慢の、穏やかな国だ。

この日、そんなミーマニ王国に、祝福の鐘が鳴り響いていた。

ローゼリア・ドラニクス侯爵令嬢と、ロベルト・フィベルト公爵家嫡男の結婚を祝う鐘の音。

積もりたての新雪を紡いで仕立てたかのような純白のウェディングドレスを身にまとう花嫁、ローゼリアは誰もが息を呑むほどに美しかった。

すらりと伸びた背筋にしなやかな体。少し赤みを帯びた栗色の髪、秋の麦畑のような小麦色の瞳。

その艶やかな姿は、一本の薔薇のよう。

そして何よりも彼女の美しさを際立たせていたのは、来賓たちの心からの祝福と、隣に立つ新郎の存在だった。

幸せに満ち足りた微笑みは、彼女の身につけるとどんな装飾品よりも輝いていた。

この笑顔と祝福に溢れた結婚式は、後々まで語られることとなる。

鐘の音は日が落ちるまで鳴り響いていた。

その日の夜。

「ローゼリアでございます。フィベルト家の皆様、不束者ですが今日からロベルト様の妻として、改めましてよろしくお願い致します」

フィベルト公爵家に、新たな家族が増えた。

ローゼリア・フィベルト公爵夫人。

先ほど、フィベルト公爵であるロベルトとの結婚式を終えてウェディングドレスを着替えたばかりの花嫁である。

栗色の艶やかな髪は腰まで伸ばされて、彼女のすらりとした美しい立ち姿に花を添えている。

部屋着のドレスをつまみでのカーテシーは、教科書に載せられそうなほど洗練されて

いて、見る者が思わずため息を漏らすほどだ。
「リア、改めてよろしく。君の部屋はすでに準備してあるから、今日はゆっくり休んでね。結婚式つて花嫁が一番大変だから」

夫となったロベルトは、今日から妻となったローゼリアをいつものように愛称の「リア」と呼んだ。

この国では珍しい亜麻色の髪に、新緑を溶かしたような瞳。

浮かべる笑顔は蕩けるように甘く、穏やかな声は川のせせらぎのようにいつまでも聞いていたくなる魅力を持つ。

それらを向けられた女性性は、熟れ切った桃の甘すぎる果汁に喉を焼かれたような心地に襲われるという。

互いが四歳の頃に婚約を決められたロベルトとローゼリアは、領地が隣同士なこともあり、顔を合わせない日のほうが少なかった。

穏やかな性格のロベルトと、お転婆娘だったローゼリアは、時に姉弟のように、時にはよき相棒として、そして愛しい恋人として、結婚式を迎えるずっと前から唯一無二人の人生のパートナーとなっていた。

そんな二人がこれからは夫婦として、ともにフィベルト公爵家を盛り立てていくので

ある。

「ロベルト様だったら、私がこの程度で疲れてしまうだけでも？ そんなに貧弱ではございません。部屋で休む前に、屋敷を案内してくださいませ」

「今さら案内が必要かい？」
「もちろんですわ！ どこに何があるかは把握しておりますが、妻として新鮮な気持ちで歩いてみたいのです」

ふふん、と胸を張ってみせるローゼリアに軽口を返すロベルト。

つい先ほど結婚式を終えたばかりの新婚夫婦とは思えない、息の合ったやり取りだ。
「まずはマーガレットに挨拶したいわ。これからは私の義妹となるのですもの」

「そう言うと思ったよ。部屋で着替えて待つているように言っているから、今から行くか」

二人は手を取り合い、微笑みながら歩いていった。

「ロベルトお兄様、ローゼリア様。ご結婚おめでとうございます。お二人が結ばれる今日という日を私も楽しみにしております」

愛らしくカーテシーを見せてくれたのはロベルトの実妹、マーガレット・フィベルト。
兄のロベルトと同じ亜麻色の髪を結い上げた、可愛らしい少女だ。

若葉のような黄緑色の瞳は、新しい義姉を温かく迎えている。絶やされることのない穏やかな笑みは兄のロベルトのそれによく似ているが、マーガレットの笑顔は春の陽だまりのように見る者の心を和らげる。

「まあ、マーガレット。今日から貴女は私の義妹なのよ？ 昔みたいにおねえさまと呼んでほしいわ」

フィベルト公爵家と昔から家ぐるみの付き合いがあったローゼリアにとって、マーガレットは実の妹も同然の存在だ。

小さい頃は「ローゼリアおねえさま」と自分の後についてきたマーガレットが、成長するにつれて「ローゼリア様」と他人行儀な呼び方になってしまい、内心はとても悲しんでいた。

（でも、今日からは義妹！ 義妹だからおねえさま呼びは当然なのよ！）

期待でいっぱい視線を向けられて、マーガレットは少しためらってから口を開いた。

「ロ、ローゼリア、お義姉様……」

「マーガレット!! おねえさまよ！ 私が貴女のおねえさまよ！」

女性にしては背が高いローゼリアの腕のなかに、マーガレットはすっぽりと収まってしまう。



温かくて柔らかく、ほんの少し甘い香りは、ローゼリアの幼い記憶と変わらない。お互いに淑女教育などが忙しかったせいで、こんな気兼ねのないスキンシップは久しぶりだった。

妻と妹のやり取りを見守っていたロベルトは、侍女に促され時計を確認してから二人に声をかける。

「こちら、リア。これからはたくさん呼んでもらえるんだから、はしゃがないの。マーガレットも明日からは学校なんだから早く休みなさい?」

「はい、お兄様。ローゼリア……お義姉様、本日はお疲れ様でした。ゆっくりおくつろぎになられてくださいませ」

ロベルトとローゼリアは、二人で寝室に向かった。

「マーガレットつたら、私たちの結婚式のために学校を休んでくれたのね。授業は大丈夫なの?」

「必要な単位はもうすべて取ってしまっているんだ。本当ならもう何日か休んでも問題はないんだけど……学園からすぐに戻るように頼まれたらしくてね」

ローゼリアは大きくため息をついた。

「相変わらず、あのお馬鹿様は好き放題してるのね。まったく……」

マーガレットはまだ学生。王都の貴族子弟が通う学園に通っている。

フィベルト公爵家から王都まで、馬車を使っても片道で三時間の距離があるため、普段は学園の寮で過ごしている。

その学園には、ミーマニ王国の王子、オズワルドも在籍していた。

オズワルド・ミーマニ王子殿下……ローゼリアがお馬鹿様と呼ぶ彼が、残念なことに、マーガレットの婚約者なのである。

第二側妃の息子であり第四王子であったオズワルド。彼が王子となったのは、ある複雑な事情によるものだった。その立場を強めるための後ろ盾として、歴史あるフィベルト公爵家の娘であるマーガレットが王命により婚約者に選ばれてしまったのだ。

なぜ、ローゼリアはオズワルドをお馬鹿様と呼ぶのか?

それは、彼がまさしくお馬鹿だからである。

王族の証であるきらびやかな金髪、上質なサファイアを埋め込んだような青い瞳。強い日差しを知らない、ビスクドールのような白い肌。

その姿はまるで絵本に描かれた王子様がそのまま飛び出してきたかのように、それはそれは美しい。

しかし、肝心の性格は童話の王子様とは対極にある。

わがままで心が狭く、癪癪^{かんじょう}持ちで自分勝手。それでいて何においても自分が一番でない気が済まないという、大変困ったお人なのだ。

たとえば「今日は上質な肉料理が食べたい」とわがままを言って作らせた料理が、いざ目の前に運ばれてくると「やはり気分ではないから魚料理に変えろ」とまたわがままを言って拒否する。

戸惑う料理長に、「王太子である自分の言うことが聞けないのか」と熱々のステーキを投げつけた話は有名だ。

学園では金を握らせた取り巻きをぞろぞろと引き連れて、授業にも出ず遊び呆けている。

教師たちすら恐れて放置している彼らを諫めることができる、唯一の人物がマーガレットだった。

王太子の婚約者であり、次期王妃として毎日厳しい教育を受け続けるマーガレットは、元々の真面目で努力家な性格もあり、貴族子弟の集まる学園でも、学業からマナー、ダンスに至るまで常にトップを誇っている。

マーガレットはそれだけの成績を取めながら、自分のことだけでなくオズワルドの単位取得や素行にも気を遣い、彼が問題を起こせば早急に対処する日々を送っていると

いう。

ローゼリアからすれば、お馬鹿様の頭のなかは、それこそビスクドールのように空洞なのではないかと疑いたい気持ちでいっぱいだった。

さらに言えば、可愛いマーガレットの手を焼かせる馬鹿の空洞の頭に藁でも詰めてやりたいとも思っている。

「明日早くに学園へ戻るみたいだから、リア特製のクッキーを持たせてあげたらどうかな？ 甘いものは元気が出るからね」

「そうですね、ロベルト様。マーガレットの好きなクルミのクッキーをたくさん焼いてあげましょう」

ロベルトも、妹のマーガレットのことを目に入れても痛くないほどに可愛がっている。だからこそあのお馬鹿様との婚約を解消できないかと幾度も国王陛下に願い出ているのだが、いまだに聞き入れてもらえていない。

学園を卒業すれば、それと同時に婚姻が待っている。

それまでになんとしても、可愛い妹があんな男に嫁ぐのを阻止しなければならぬ。

「私も全力でお手伝い致しますわ、ロベルト様。私にとっても可愛い可愛い義妹^{いもむすめ}ですもの」
「頼りにしているよ。でも、あまり無茶はしないでね？ 君も、僕の世界で一人だけの

大切な奥さんなんだから」

「まあ、嬉しいですわ」

幸せな笑い声とともに、フィベルト家の夜は更けていった。



結婚式からあつという間に三ヶ月の時が経ち、ローゼリアはすっかりフィベルト公爵家の領地に馴染んでいた。

「奥様！ 作物泥棒です!! 今年取れた麦を、馬車にたっぷり載せて逃げていきやがりました!!」

「なんですって!? 馬車の数と逃げた方向は?」

「北東の方向に、馬車は五台、幌付きです!!」

農民たちと世間話に花を咲かせていたローゼリアは、ご馳走になっていた蒸かし芋を急いで頬張り、水を一気に喉に流し込むと裾の長いドレスをもとめせず走り出した。

手にへばりついた芋の皮をドレスの裾で拭ってから、高らかに指笛を鳴らす。

嘶きとともに現れたのは、ローゼリアの髪と同じ栗色の毛の美しい牡馬だった。

「シユナイダー、追うわよ!!」

ローゼリアがドレスをひるがえしてすばやく飛び乗ると、シユナイダーと呼ばれた牡馬は心得たとばかりに蹄を鳴らす。

この領地内で馬車が何台も走れるほど広い道は限られている。

そして北東の方向で作物泥棒たちが身を隠せそうな場所、または盗品を売りさばきそうな場所となればさらに絞り込まれる。

狭くはない領地の地図を頭のなかに広げ、不届き者に追いつくための最短ルートを組み上げた。

彼らよりも自分のほうが数段有利であることを、ローゼリアは確信していた。

馬車では入り組んだ森のなかを走ること、障害物を飛び越えることもできないからだ。

シユナイダーに跨り手綱をさばけば、狭い木の間を擦り抜け、大きな岩も簡単に飛び越えられる。

目標の馬車はすぐに発見できた。

先回りして小高い丘から飛び降りると、先頭の御者が驚き、力任せに手綱を引っ張る。馬車を引いていた馬が驚いて暴れ回った。

それに釣られたように、後ろについでいた泥棒馬車の馬たちも立ち止まって暴れ出し、荷台が一つ倒れる。突然の事態に、泥棒たちはみっともなく慌てていた。

ローゼリアがいることを忘れ、落ちた荷物に群がってどうにか無事な荷馬車に積み込もうとしている。その隙に、ローゼリアは暴れる馬たちにためらいなく近づき、手早く馬たちを落ち着かせていった。鞍と手綱たづなを外すと、皆嬉しそうに走り回る。

「あらあら、皆ずいぶん走り足りなかったのね。かわいいそうに」

贅肉のつき方や筋肉の衰え具合から、馬たちが馬車を引くための道具としてしか扱われていなかったことはすぐにわかった。

体を千切らんばかりに喜び走り回る姿を見ると、ストレスもたつぷり溜め込んでいたようだ。

「シユナイダー、あの子たちをお父様のところに案内してあげなさい」

ローゼリアの言葉を聞いてシユナイダーは心得たとばかりに駆け出し、解放された馬たちは喜び勇んでシユナイダーについていった。

ローゼリアの父、アルゴス・ドラニクス侯爵は馬をこよなく愛する人で、ローゼリアは幼い頃から「いいかローゼリア、馬が人間を乗せてくれていると覚えなさい。彼らに感謝と敬意を忘れてはいけない。人間が彼らよりも優れているところなど、一つとして

ないのだからな」と聞かされて育ったほどだ。

そんな父の言葉を思い出していると、ようやく異変に気づいた男たちが何か喚き始めた。

「よくもうちの馬を盗みやがったな!! 料金払え!!」

「ダメになった荷台と荷物代もよこしな!!」

普通の令嬢なら疎み上がるだろう汚らわしい罵声に、ローゼリアはにつこりと微笑む。「ごめんなさいね? 私、泥棒語は嗜たしなんでおりませんの。人間の言葉でお話していただきたいわ」

その言葉に男たちは顔を真っ赤にして、唾を飛ばしながら何事か喚き散らしながら、腰に巻いていた短剣を振り回し始めた。

全員が武器を抜いたことをしっかりと確認してから、ローゼリアはふわりと飛び上がる。そして太い木の幹を蹴ってくるりと回転し、その勢いで泥棒の背中に思い切り蹴りを入れた。

「ぎゃあっ……ぐっ……」

蹴られた大男は泡を吹き、ろくに悲鳴も上げられないまま地に倒れ伏す。

「皆様ご存じ? 背中から肺に直接強い衝撃を与えると、一時的に呼吸が止まるんで

すつて。もちろん、一時的ではなく永久に止める方法もございますよ。よろしければご覧に入れましょうか？」
 につこりと微笑むと、それを見た者たちは額を土に擦りつけて降伏した。
 蹴り飛ばされた泥棒はヒューヒューと細い息を漏らし、顔は青白く冷や汗をびっしりとかいている。

自分よりも大きな男をたった一蹴りで沈め、息一つ乱さず微笑む美しい女性は、ゴロツキたちには未知の化け物にしか見えなかったのだ。

泥棒たちは村に連行される間、何度もローゼリアに謝罪と命乞いをしていたが「貴方たちが謝罪するべきは、丹精込めて育てた麦を未熟な状態で刈り取られてしまった農家の皆様よ。まあ、貴方たちがいくらお粗末な謝罪を並べようと、その汚らわしい首を捧げようと、麦は戻らないわ。そのことをきちんとその軽そうな頭に入れて謝罪の言葉を考えるのね」と冷たく言われると、真っ青になって黙りこくってしまった。

彼らは農民たちに何度も頭を下げた後、馬舎での監視付きの労働という罰が決まった。畑一面分の麦が潰されてしまったため、被害に遭った畑の持ち主は、税のために貯蓄をだいたい削らなければならなくなった。その分を賠償させることにしたのだ。

泥棒たちは今後、これまで道具として扱ってきた馬の世話をしながら朝から晩まで働

き、最低限の衣食住を保障される代わりに給与はすべて賠償金に充てられる。

馬舎番は、かつて騎士として腕を鳴らした者や、戦場を走り回った経験のある男たちばかりだ。彼らの監視を逃れることは難しい。

だが、冷たい牢に何年も放り込まれるよりはマシだろう。

「とういわけで、これがその報告書ですわ、ロベルト様」
 「うん、妥当な対応じゃないかな。ありがとう、リア」

畑を荒らされたからといって、簡単に税を軽くすることはできない。そう虚言して税から逃れようとする民もいるためだ。

被害に遭った畑の持ち主の青年は、損失が戻ってくるのに時間がかかる分、損をする結果になってしまったが、その後、彼を筆頭に畑の見回りを強化しようと新たな働きを見せているらしい。

また、いざという時のためにきっちり貯蓄をしていたことから、近所の奥様方から堅実な殿方と評判になり、次々と縁談が舞い込んでくるということだった。

禍を転じて福と為す、という結末を祈るばかりである。



公爵夫人としての楽しくも忙しい毎日は、あつという間に過ぎていった。

もうすぐ学園が長期休暇に入り、マーガレットが帰ってくる。

フィベルト家の使用人たちはそわそわと浮かれ出し、いつも隅々まで磨き上げられている部屋の床や窓はもちろん、メイドたちはマーガレットが気に入っている花柄のティーセットや小鳥の刻印が入ったシルバーをしっかりと磨いて帰りを待ちわびる。

庭師たちはいつにも増して気合をいれて芝を美しく整え、長期休暇に合わせて植えたらしい球根が順調に蕾をつけるのを満足げに眺めていた。

領民たちも、ローゼリアが視察に訪れる度「マーガレット様はいつ頃お帰りになられますか？」と毎日聞いてくる。

特に楽しみにしているのが孤児院の子どもたちで、少年たちは森に入り「マーガレット様のために宝を探しに行くぞ！」と探検隊を結成しては孤児院を管理するシスターに止められている。

ちなみに彼らの言う宝とは、綺麗な花やコケモモだそうだ。

花は押し花に、コケモモはジャムにしてマーガレットにプレゼントするんだと息巻く彼らは、今日も懲りずに探検を画策する。

見ている分には微笑ましく愛くるしいが、毎日駆けずりまわるシスターを見ると、子どもとは残酷な生き物だとローゼリアは思う。シスターを手助けするより、可愛らしい子どもたちを眺めることを大人に選択させてしまうのだから。

領地全体がマーガレットの帰りを心待ちにしていた。

マーガレットから「来週帰る」としたためられた手紙も届き、領民たちはさらに浮かれていた。

しかし、そんな夜にマーガレットは思わぬ姿で帰ってきたのだ。
雨が叩きつけるように降り注ぐ、不気味な夜だった。

第一章 可愛い義妹が婚約破棄されました

ロベルトとローゼリアは、ワインと今年熟成が終わったチーズを楽しんでいた。

そんななか、正門のほうがやたらと騒がしくなり、不審に思っていると、メイド長の

アンナが珍しく慌てた様子で部屋に入ってきた。

「ろ、ロベルト様！ 緊急事態でございます!!」

「どうしたんだい？ そんなに慌てて、君らしくもない」

「まあ、こんな時間にどうしたの？」

「先ほど、学園の紋が描かれた馬車が公爵領内に立ち入り許可を求めてまいました……!」

アンナの言葉に、ロベルトは怪訝な顔をする。

マーガレットが帰るといふ手紙や伝言は届いていない。

学園の長期休暇は来週からの予定だ。

何より、こんな夜中に学園の馬車を使って帰ってくるとは、何かあったとしか思えない。「馬車には、マーガレット様に乗っておられました。……報告によると怪我をなさり、気を失っているとのことですよ」

「なんですって!？」

「……詳しく説明を頼む」

ロベルトの口調は穏やかだが、声色は氷のように冷たい。

「マーガレット様は現在、私兵用の救護舎で手当てを受けてお休みにいられているそう

です。幸い、痕や後遺症が残るような大怪我ではないとのことですよ。馬車の御者は事情聴取のため、見張らせております。……報告は以上になります」

アンナの言葉も淡々としているが、瞳は怒りに燃えている。

彼女はマーガレットが赤子の頃から仕えている。

今すぐにも飛んでいきたい気持ちを必死にこらえているのだ。

「馬を用意してくれ。僕とリアが行くから、君たちはマーガレットのベッドの用意を頼むよ」

「かしこまりました。消化によいお食事と、お風呂もご用意致します」

アンナは手早くロベルトとローゼリアの馬を用意させた。

「ロベルト・フィベルト公爵だ！ すぐに妹のもとへ案内してほしい！」

馬を下りて救護舎の前で声を張ると、なかから飛び出してきた看護師が引っ張るよう二人を連れ込んだ。

マーガレットは清潔なベッドに寝かされ、荒い息でうなされながら眠っていた。

体は布団がかかって見えないが、頬にガーゼが貼られているのを見て、二人は血の気が引く思いだった。

「おそらく素手で打たれたものかと……腫れておりました」

「なんだって!? ほかの傷の記録も見せない!」

滅多に声を上げることはないロベルトだが、さすがに耐えられなかったようだ。

ローゼリアは眠るマーガレットを今すぐに抱きしめてあげたかった。

しかし、青ざめて苦しげに喘ぐマーガレットは、ヒビの入ったガラス細工のように、触れた途端に崩れてしまいそうだった。

公爵家の娘であり、王太子の婚約者のマーガレットに対して暴力を振るう人間などい
ないはずなのに。

その時、わずかに稲光が走った。

近くで飼われている家畜たちが怯えて嘶き、それを慰めるように番犬たちの遠吠えが
響く。

「た、大変だ!! 馬車が!!」

「止める止める!!」

「近づくな! 蹴られるぞ!!」

外が何やら、騒がしい。

「貴方たち! 何を騒いでいるの!?!」

堪らなくなりローゼリアが外に飛び出すと、私兵たちが駆けてきた。

「も、申し訳ございません!! 学園の馬車を引いてきた馬が、突然暴れて飛び出していっ
たんです! とても手がつけられなくて……」

鞍を外して休ませていた馬が、家畜の声に驚き、暴れて逃げ出してしまったらしい。

王都育ちの馬は、自分以外の動物を人間しか知らないことが多い。手綱たづなも外してしま
い、手がつけられないようだ。

学園の馬は国王から寄付されたもので、怪我をさせれば調度品を壊すのと同じ処分が
下る。

「まったく……そんなことで騒いでいたの?」

ローゼリアはため息をついてから、指笛を吹く。栗色の愛馬シユナイダーは風のように
に馳せ参じた。

「ちよつと行ってくるから、ロベルト様に大丈夫だと言っておいてちょうだい」

すばやくシユナイダーに跨ると、ローゼリアは駆けた。

例の暴れ馬はすぐに見つかった。兵が注視しているが、何もできずに硬直している。

「フィベルト公爵当主が妻、ローゼリア・フィベルトが通る!! そのの者、全員邪魔
よ!! 早く去りなさい!!」

つむじ風のように駆けるローゼリアの声が届くと、兵たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。

邪魔者がいなくなり、ローゼリアはすばやくシユナイダーを暴れ馬に並走させる。そして鞍に足を乗せると、勢いをつけて暴れ馬の背に飛び乗った。

「どう、どう、どう」

鞍も手綱たづなもない裸馬の首にしがみつき、足で腹部をとんとんと蹴る。

リズムカルに蹴りを繰り返すと、馬はだんだん落ち着いていった。

やがて、ぼくぼくと穏やかな足取りになっていく。

「よし、よし……いい子……この子の鞍と手綱たづなを！ すぐに持ってきなさい！」

遠くからぼかんと眺めていた兵たちは、弾かれるように馬舎へ走っていったのだった。

馬を無事に引き渡したローゼリアが救護舎に戻ると、マーガレットはまだ眠っていた。

「ロベルト様はどちらに？」

「馬車の御者から直接話を聞いてくるとのことですよ」

看護師が答えて、数分後にロベルトは戻ってきた。

「リア、さっきは本当に助かったよ。ありがとう。こっちも終わったよ」

「おかえりなさいませ。私にも詳細をお聞かせください」

部屋を変えて、ロベルトは語り始めた。

事の始まりは今日の夕方、学園でパーティが開かれたそうだ。

長期休暇の前に生徒たちで楽しもう、といった趣旨のパーティで、マーガレットも招待を受けたらしい。

「御者が、マーガレットの友人からの手紙を持っていったよ」

ロベルトが広げた手紙には、ローゼリアも見覚えのある伯爵家のサインが書かれていた。

貴族は、わざと綴りを変えたり文字に癖をつけたりした、他人には真似できないサインを持っていて、蠟印などが用意できない緊急時に使用する。手紙に書かれていたのはそのサインである。

「マーガレットの同級生だ。何度も手紙をくれている子だから間違いないと思う」

「ええ、私も見せてもらったことがありますわ」

その手紙は、こう始まっていた。

〆オズワルド王太子殿下が、マーガレット様に婚約破棄を言い渡しました。



時は少し戻り数刻前、舞台は学園に移る。

「マーガレット！ 貴様のような家柄しか取り柄のない醜悪で浅ましい女にはほとんど愛想が尽きた！ 今まで散々貴様の顔を立ててやったというのに、私の愛するエンジェラを陥れるなど許せん！ 貴様との婚約は破棄だ！」

それは、学園で行われたパーティーで突然始まった茶番だった。

三ヶ月前に特別編入してきた男爵令嬢、エンジェラ・ルーバーに対して、マーガレットが持ち物を隠した、悪口を流した、池に落としたり、ドレスを切り裂いた……などなどと怒鳴るのは、マーガレットの婚約者にしてミーマニ王国王太子殿下、オズワルドだ。

彼の周りには騎士団長の息子や宰相の息子など、十数人の見目麗しい男子生徒たちが集まっており、オズワルドの腕にしがみつく愛くるしい少女、エンジェラを守るように囲んでいた。

「マーガレット様、ごめんなさい!! エンジェラが悪いんです……マーガレット様は誰にも言うなって……ぐすっ」

「君は悪くないよエンジェラ！」

「怖かったね、もう大丈夫だよ！」

わらわらとエンジェラにたかる周りの男たちは、さながら砂糖菓子に集まる蟻のようだ。

そんな蟻たちを、パーティーに参加していた生徒たちは冷ややかな目で眺めている。

マーガレットとオズワルドの不仲は、学園に所属する生徒たちはもちろん、この国の貴族なら誰もが知る事実だ。

オズワルドの実母は第二側妃であり、伯爵家の出身である。

本来は王太子になれるはずがなかったオズワルドの立場を強めるために、王国建国時から続く名家であり、多くの姫君が嫁いでいったフィベルト公爵家の血を取り込もうという魂胆で決められた、完全な政略結婚。

王の勅命であるにもかかわらず、オズワルドはマーガレットに対して誰もが眉をひそめるような扱いをしてきた。

婚約してから一度として贈り物をしたこともなく、パーティーでは仏頂面でファーストダンスを踊ると、役目は果たしたとばかりにほかの女性たちを待たせ、飲んで食べて騒ぐばかり。

パーティーに招かれた客人たちの対応はすべてマーガレットに丸投げ。

マーガレットは挨拶や親交のダンスに加え、気まぐれに癩癩かんじくを起こすオズワルドを諫め、ほうほうへ謝罪に回る。彼女がオズワルドとともに訪れたパーティーでは一口の水すら口にできない、ということとは珍しくなかった。そんな姿を、多くの貴族たちが目の当たりにしている。

そして今、下位貴族の娘の腰を抱きながら、彼女にたかる蟻のごとき男たちとともに根柢のない言いがかりの罪状を高らかに読み上げるオズワルドの姿は、醜悪そのものだった。

オズワルドの喚き、エンジエラのすすり泣き、蟻男たちの怒声、すべてがただの騒音となり、生徒たちの心は冷たく風いでいく。

その空気を感じ取ったのか、オズワルドは唾を飛ばしてさらに怒鳴り散らす。

マーガレットはそんな様子を哀れむように見ていた。

「婚約破棄と申されましたが、オズワルド様に私たちの婚約を取り消す権限はございません。そちらのエンジエラ嬢と仲良くなさりたいなら、どうぞお好きになさればよろしいかと存じます。しかし、お忙しい陛下と王妃様を困らせるような間違いだけは起こされませんように……王太子殿下下？」

淡々と、無の表情で告げるマーガレットは冷静だった。

もう慣れてしまったのだ。婚約破棄という言葉も、下位貴族を待らせている婚約者の姿にも。

心に波風すら立たなかった。

彼女の頭には、この後の生徒たちへの対応と教師たちへの報告、王城への報告書をまとめてから第三者に証言をもらって国王に進言など、この後やるべき仕事をどのようにさばいていけば長期休暇を削らずに済むかという事務的な考えしかなかった。

怒りも悲しみも、嫉妬心も羞恥心もなく、淡々とした思考。

そんな態度と周囲からの冷たい視線に耐えられなくなったのか、頭に血が上ったオズワルドはマーガレットの胸倉を掴み、美しいかんばせを思い切り殴りつけた。

「い、痛い！ 指があ!!」

しかし、痛みに悶えたのはオズワルドのほうだった。

突然殴られても、マーガレットは声を上げなかった。だが衝撃で、身につけていたイヤリングが外れてオズワルドの足下に転がった。

それまで崩れなかった表情に焦りを浮かべ、マーガレットがそれを拾おうとしたのを見逃さなかったのが、エンジエラだ。

「オズワルド様!! 大丈夫ですか!？」

彼女はオズワルドを心配して駆け寄るふりをして、イヤリングを思い切り踏みつけた。

「あっ……!!」

バキバキッという不吉な音に、マーガレットは大きく目を見開いた。

「きゃああつ! マーガレット様ごめんなさい! 謝りますからそんなに睨まないでくださいませ!」

エンジェラの甲高い声に、オズワルドはマーガレットに非難の目を向けた。

「オズワルド様! マーガレット様のイヤリングを壊してしまいましたあゝ睨んでます!」

「ふん、イヤリング一つで心の狭い女だな!」

オズワルドはエンジェラを抱きながら、初めて見るマーガレットの絶望の表情に恍惚を覚えた。

新しい玩具を与えられた子どものような笑みを浮かべて、粉々になったイヤリングを呆然と見つめるマーガレットに近づく。

「もう一つもよこせ!」

「い、いやです! これはお母様の形見……これだけは……!!」

「うるさい! 私に逆らうか公爵家風情が!!」

マーガレットは残ったイヤリングを耳から外し、両手のなかに固く握りしめた。

しかしオズワルドが目配せすると、男たちが嬉々としてマーガレットを取り囲み、腕や髪を引っ張り、背中を蹴り飛ばした。

マーガレットは亀のように丸くなりイヤリングを守ろうとしたが、男たちからの攻撃はどんどん激しくなり、無理やり立たされて突き飛ばされ、腕を踏みつけられて、ついにイヤリングはマーガレットの手のひらからこぼれた。

それをオズワルドは、男たちに押さえつけられたマーガレットの目の前で何度も踏みつぶし、原形がわからなくなるほどに粉々にした。

それを唾然として見つめることしかできない、ボロボロになったマーガレットを見て、オズワルドは満足したのか取り巻きを引き連れてパーティ会場を後にいった。

醜悪な笑い声がホールに響き、そのあまりにもおぞましい光景に、生徒たちは凍りついたように立ち尽くす。

これがいずれ一国の王として君臨する男のことなのか?

皆の顔に恐れと不安が浮かぶなか、パーティホールに数人の男女が駆け込んできた。マーガレットの友人であり、王族に連なる上位貴族の家系、もしくは王家に仕える、

発言力の強い親を持つ生徒たちだ。

パーティホールは、学園に数か所存在する。

オズワルドとエンジェラの取り巻きたちの策で、彼らへの招待状には違うホールが開催場所として記されていた。

全員同じ封筒が使われていたため、わざわざ互いに場所を確認することもしなかったのだ。

まさか、マーガレットを孤立させるためだけにそんなことをするなんて、誰が想像できるだろうか？

そしてオズワルドの作り上げた茶番の観客として招かれた生徒は、下位貴族の娘や家の後継者から外れた良家の次男や三男など、立場の弱い者ばかりだった。

暴力を振るわれるマーガレットを、ただ傍観することしかできなかった彼らを責めるのは難しい。

あそこで一言でもオズワルドの意に沿わない発言をしていたら、明日にはその者の家は消えていたとしてもおかしくないのだ。

マーガレットの友人たちが初めからパーティに参加していれば、オズワルドの愚行を余さず記録し、国王と重鎮たちに報告が回っていたことだろう。

しかし、彼らは別のホールに誘導された。

事件の後、その場に居合わせた生徒たちから事の一部始終とオズワルドたちの言動の証言をできる限り収集したが、証言だけではあまりにも弱すぎる。

パーティの招待状についても、手違いだと言われればそれ以上の言及は難しい。

上位貴族の子女といえども一介の学生に過ぎず、未成年の彼らにできることは残っていない。

しかし、彼らの思いは一つに固まった。

オズワルドをこのまま王にしてはならない。

そして、マーガレットにこれ以上の我慢を強いることは、彼女の身に危険をもたらすことになるだろう、と。

マーガレットの身に起きたことの顛末が綴られた長い手紙は、インクが滲み、ひどい悪筆だった。

よく知った賢い少女の手紙からは想像もつかない、荒々しい怒りに満ちた文字だった。「傷の記録を残せば王太子たちの犯行の証拠になります。逆に治ってしまえば証明が難しくなるし、マーガレット様が目覚めたら事を大きくしないように黙っていてほしいと

言うだろうから、証拠と一緒に本人を帰します。手当てもせず付き添いもなく、傷ついたマーガレット様を馬車に乗せたことは私の独断ですので、処罰は私に……このことだ」

「確かにこの怪我なら、一週間もあれば目立たなくなってしまうわね」
 国王夫妻は今、隣国へ外交に出かけている。おそらく婚約破棄はオズワルドの独断だろう。

国王が帰ってきたら、事件が丸ごとなかったことにされる可能性は高い。

封筒には、ハンカチに包まれたイヤリングの欠片も入っていた。

原形を留めていなかったが、瑠璃色の珊瑚の欠片は間違いなく、マーガレットの母親、マリアの形見のイヤリングだった。

ロベルトとマーガレットの実母、マリアはマーガレットがまだ幼い頃に亡くなった。

マーガレットに残された記憶は、マリアがとても優しい母親で、幼き日の自分は母が大好きだったというだけのおぼろげなもの。

だからこそ、自分に託されたイヤリングは、マーガレットにとって母親の存在を確かなものにしてくれる何よりの宝だった。

それを取り上げられ、踏みにじられた。

どんなに悲しかっただろう。

どんなに無念だっただろう。

「うふふ、うふふふ」

「リア、僕も同じ気持ちだよ」

「ええ、ロベルト様。うふふふ」

ローゼリアの唇からは唾が溢れて止まらない。

国のために、自分のすべてを捧げて尽くしてきた少女への横暴は、届いてはいけなるところに届いてしまったのだ。

——殴ったんだから、殴られても文句は言えないわよね？ お馬鹿様。

ロベルトは、すぐさま学園にマーガレットの療養休暇を申し出る手紙をしたためた。

本来ならすでに卒業に必要な単位をすべて取得しているため、申請を出さなくても休めるのだが、マーガレットが学園に戻れないほど体調を崩しているという証明書は、後々の裁判で役に立つだろう。

そのための手紙なのだ。

そしてマーガレットが眠っている間に、傷の記録は一つ残さず取ることができた。

ドレスに残っていた足跡に、王都に一軒しかない靴屋のオーダーメイド品にのみ刻まれるマークが見られたため、サイズを測ればその足跡の主はすぐに特定された。

そこから芋づる式に、オズワルドと彼から滴る甘い蜜にたかる蟲たちの情報を得ることもできた。

そしてローゼリアは、マーガレットが寮に残してきた荷物を取りに行くという名目で学園に向かうことにした。

情報を目視することはとても重要なのだ。

「いいのかいリア？ おそらくあまり楽しい母校見学にはならないよ」

「ええ。けれどロベルト様がマーガレットの兄なのは、あのお馬鹿様も知っていますからね。私が行くほうが、向こうも先手を取りにくいでしょう？」

できることなら学園の詳しい内情を知りたい。きちんと事実と状況を把握しなければ、効果的な攻撃方法は見えないのだから。

目を覚ましてからこの数日、マーガレットは空元気に振る舞っているようだった。

ロベルトが事情を知っていることを伏せて、学園で何があったのかと尋ねたところ、マーガレットは「オズワルド様から婚約破棄を言い渡されましたの……あの方のわがままを止められなかったのが悔しいですわ。私のお役目なのに」とだけ告げた。

怪我に関しては転んだ、イヤリングは転んだ拍子に壊してしまったとしか話さず、いつもと変わらず明るい様子を装っている。

おそらく、本当のことを話せばロベルトやローゼリアが激怒して、王太子だろうが学園だろうが叩き潰すために立ち上がると勘づいているのだ。

しかし、相手は腐つても王族。家を巻き込んでほならないと、いざとなれば自分一人が罪を被れるようにと、事実を話そうとしないのだ。

——ごめんなさいね、マーガレット。貴女の気持ちは受け取れないわ。私もロベルト様も、可愛いマーガレットをここまで侮辱されて黙っていられるほど、大人しい人間ではないのよ。

「リア、頼んだよ。マーガレットのことは任せておいて」

「ええ、せっかくだから思い切り遊ばせてあげて。今まで王妃教育が忙しくてそんな時間、なかったんだもの」

たくさんのお馬鹿様の妻となるために費やしてきたマーガレット。たくさんのお馬鹿様たちにご挨拶に参りましょうか」

ローゼリアはころころと、ころころと嗤う。



ローゼリアは学園へ向かう馬車に揺られながら、ぼんやりと外を眺めていた。

馬車に描かれている家紋はフィベルト公爵家ではなく、彼女の生家であるドラニクス侯爵家のもの。

フィベルト家が動いていることを学園に悟られないほうが、下手に取り繕われなくていいだろうと思ひ、家から馬車を借りたのだ。

窓を流れる景色を眺めながら、ローゼリアは大きなため息をついた。
なぜこんなことになってしまったのか、と。

事の始まりは十二年前までさかのぼる。

当時、ロベルトとローゼリアは八歳。マーガレットは四歳。

まだ五歳だったあのお馬鹿様ことオズワルド王太子殿下は、元々第四王子だった。おまけに第二側妃の息子であり、母親の生家は伯爵家。

侯爵家生まれの正妃は二人の男児に恵まれ、隣国の元第二王女である第一側妃にも男

児が一人生まれた。

オズワルドが王太子になれる可能性は限りなく低かったのだ。

あの恐ろしい流行り病さえなければ。

十二年前、このミーマニ王国に広がった流行り病でたくさんの国民が亡くなった。

病には特效薬が存在したが、その特效薬の要となる薬草はミーマニ王国の気候では育ちにくく、ほとんどを他国からの輸入に頼っていた。

不幸は続き、その薬草がどの国でも不作だったのだ。

ただでさえ他国から買いつければ割高になるのに、不作ならなおさらだ。

国全体に行き渡るほどの量を仕入れるとなると、病が終息しても国内が貧困に喘ぐことになるのは誰の目にも明らかだった。

そのため、病の特效薬が存在することは民に秘匿され、王族と有力な貴族が優先的に薬を支給された。

その後、貴族が自分の治める領地から人間を選別して薬を分け与える手筈となっていたが、それに反対する女性がいた。

ロベルトとマーガレットの実母、マリア・フィベルト公爵夫人であった。

「恐れながら、国王陛下は国内に争いの火種を放り込むおつもりですか？ この病に苦

しむ民が何人か、それにより親や子どもを亡くした民が何人かご存じでして？ そんななかで突然病を克服した人間が現れれば、怒りの矛先を向けられるのは彼ら自身でございます。陛下におかれましては、命を救う薬を、人柱を作る毒に変えるおつもりですの？」

もちろん、問題はそれだけではない。

一度特効薬の存在を秘匿してしまつた以上、薬の材料が足りないから大量生産ができないという事実を告げたところで民は信じるわけがない。

今もどこかに薬が大量に隠されているのかもしれない、と考えるのは当然のこと。命の危機に立たされた人間の前では、権力など紙でできた壁のように脆くなるのだ。

貴族たちの屋敷や蔵に潜り込み、使用人たちを攫つて薬のありかを聞き出そうと乱暴を働く。それ以外にも、貴族に不満を持った平民による暴動の危険はいくらでもある。

さらに恐ろしいのは、それにより再び病が広がる可能性があるということ。

一度薬を飲めばもう安心だと貴族たちは高を括くくっているが、病にかからなくなるわけではないのだ。むしろ、さらに恐ろしい病に発展した例は多く存在する。

「これらはすべて、憶測でも女の戯言ざれごとでもございません。世界中に多数の実例が存在する、回避できる未来ですわ。国は人により成り立つものであり、国の病は薬で治るものではないです。そのことをゆめゆめお忘れなきよう」

その場に居合わせた国の重鎮や王族たちは、そこまで言われてもマリアを嘲笑つて相手にしなかつた。

何が起ころうとも自分たちには関係ないことだ、と考えていたのだろう。

マリアは支給された特効薬に関する書物を集めた。そしてその特効薬と、隣国で育てられている植物の蜜を混ぜると、即効性は薄れるものの症状が和らぐということ、その蜜を毎日一匙ずつ飲み続ければ、その間は病の進行を止められるという情報を得た。

マリアはその情報を王族にもほかの貴族にも惜しみなく共有したが、そんな手間のかかることをする必要はないと皆はせせら笑つた。

それでもマリアはこの方法で、支給されたわずかな量の特効薬から、領民全員に行き渡る量の薬を確保することに成功した。子どもや赤ん坊には少ない量を継続して飲ませることで、症状を緩和させ、その子の親たちにも心の余裕を作ることができた。

ほかの貴族たちは、マリアを子どもに薬を満足に与えない悪女わるめと罵つたが、マリアは気にも留めず蜜を使った薬を携えて領民たちの家を一軒ずつ回り、必要な分を与えて症状を記録し、手を握り、声をかけ、食べ物や毛布も支給した。

その方法はドラニクス侯爵領も取り入れ、二つの領地で物資などを支援し合つたおかげで、領民の死亡率は他領の一割にも満たなかつた。

一方で、限られた領民にだけ薬を支給していた領地は、マリアが危惧していた事態が次々に起こり、病に苦しむ民たちが暴動を起こし、貴族の屋敷に火を放つという事件にまで発展した。

暴徒と化した民たちには武装した騎士すら近づかなかった。

すべてを失った人間がどれだけ恐ろしいかを一番理解していたのが、戦場を知る彼らだからだ。

そして少しずつ、マリアの意見と蜜による緩和策に対する見方も変わっていき、貴族たちは群がるようにマリアに教えを乞うた。

フィベルト領とドラニクス領では、ほとんどの民が病を克服していたこともあり、マリアは自領のことは信頼できる人間に任せて他領にも足を運ぶようになった。蜜と薬の配合の仕方や、飲み込めないほど疲弊している患者への対応など、必要な治療法を詳しく教えた。

貴族の多くは、患者に触れることすら忌避したが、民のなかにはマリアを手伝いたいと熱心に治療活動に取り組む者も少しずつ増えていった。

病に苦しむ民が減るにつれて、貴族たちも「女風情」と馬鹿にしていたことを忘れ、マリアを聖女、天使だと崇めた。

そして一年。マリアは病の終息を見届け、静かに亡くなった。

その死因は病によるものではなく、過労だった。

治療を施した後も寝ずに経過を記録し、少しでも多くの情報を取る。そんな生活を続けてきたがゆえのことだった。

蜜による治療法は効果が実証されてきたとはいえ、民たちの心は不安に満ちていた。

一人でも多くの民を救い、効果を実感させることで不安を取り除いていかなければ、この治療法を広めることはできない。

国はすでに何人生き残るか、その枠に誰を入れるかという政策で動いていた。それははダメなのだ。

死は悲しみを生む。悲しみは広がり、時に憎しみへ変わる。それは国を呑み込み、どんな薬も効かない病となるのだ。

その憎悪という病に吞まれた国に待つの、ひと欠片の希望すら残らない滅亡。

数多の先人たちが、その恐ろしさを記録し、二度と繰り返されないよう未来を願ってきた。

マリアはそれを知っていたからこそ、命を削っても民を救ったのだ。

そして眠るように、息を引き取った。

自分の死を最後に、病による悲劇が幕を下ろすことを祈り、眠ったのだ。マリアの死は美談として国中を駆け巡った。

国はどこにいつてもマリアへの称賛と、彼女の死を惜しむ声に溢れた。マリア・フィベルトについて綴られた書物は飛ぶように売れ、吟遊詩人は次々と詩を作り、子どもたちがわらべ歌にして口ずさんだ。

それに焦ったのが王家の者たちだった。

国民たちの支持はフィベルト公爵家とマリアに大きく傾き、逆に特効薬の存在を秘匿して身内で独占し、安全な城内で悠々と過ごしていた王族に対する不満は大きかった。

自分たちへの支持をなんとか持ちなおそうと国王が提案したのが、学園の卒業を間近に控えた王太子に炊き出しや配給を行わせることだった。

当時は病の脅威こそ取り除けたものの、田畑の多くは手が足りず荒れ果て、作物もほとんど育っていない状況だった。

そこでパンや温かいスープを王太子が手ずから施すことで、国民たちからの好感度を稼ごうと考えたのだ。

当時の王太子だった第一王子は賛成し、第二王子も手伝い、張り切って配給に勤しんだ。配給は好評だったが、ここで再び悲劇が起こった。

第一王子と第二王子が突然、血を吐いて倒れ、そのまま儂くなったのだ。

原因は、なんと病の特効薬だった。

二人は病が流行り始めた頃に薬を飲んでいて、実際にかかったわけではないが、予防になるだろうと考えたのだ。

そして配給を始める前にも、念のためにもう一度薬を飲んだ。それがいけなかったのだ。実は特効薬に使われている薬草は、毒薬としても使われる。薬と毒は表裏一体とはよく言ったもので、服用する量や頻度でその効能は大きく変わる。特効薬は一度服薬したら、発病しない限り二年間は時間をおかなければ飲んではならないものだったのだ。

かつて流行り病が蔓延した国のほとんどは滅んでいたために、薬に関する情報は知られていないことが多く、薬そのものが希少であるせいで、発病していない者が短期間に二度も薬を飲んだ事例もなかった。

病にかかってから薬を飲んだのであれば、摂取した薬は本来の役割を果たすために効果を発揮し、毒となる成分も消えていく。しかし王子たちは発病もしていないのに二度も薬を飲んだため、薬に含まれる毒の成分が体内で致死量を超えてしまったのである。

原因がわかっていても、即位を間近に控えた王太子と第二王子が同時に亡くなった事実はいくらも変わらない。